



竜頭蛇体のじゃがまいたをモチーフにした逆Jの字型の保育所全景

「間々田のじゃがまいた」から発想した竜頭蛇体の**栃木県産材**に溢れた保育所 ～木材・ヒノキ合板・ヨシズ・県木～

小山市間々田地区に点在していた2つの保育所を統合し、新たな敷地に整備した保育所です。地域の重要無形民俗文化財「間々田のじゃがまいた」をモチーフとし、緩やかな曲線を描く建物全体を竜頭蛇体に見立てることで、地域に永く愛される保育所を目指しました。蛇腹にあたる部分を動線兼ランチスペースとし、背側に保育室などの諸室を配置することで、建具の開閉によってランチスペースを保育室の延長としたり、保育室同士も場面に応じて一体利用や分割利用が可能なフレキシビリティを備えています。また逆J字型の平面計画とすることで、どこからでも子どもたちの様子を把握しやすい見通しの良さと、中庭を介した移動距離の短縮により、保育士にとっても管理しやすい計画としています。

構造材には栃木県産材（思川流域材）のスギ・ヒノキを採用し、家具には県産ヒノキ合板を、外構には渡良瀬遊水地のヨシズを用いたすだれを用いています。本計画を契機として、小山市と栃木県木材業協同組合連合会との間で「木材利用促進協定」が締結され、地域産業の保全と発展にも寄与しています。



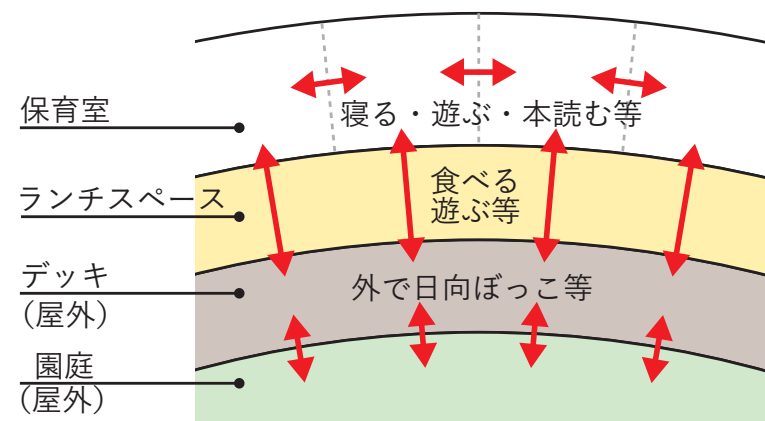
間々田のじゃがまいた



みんなのデッキを囲う大らかな曲線を描く大屋根と軒下空間

子どもたちの**原風景**を紡ぐ多様性のある使い方

子どもたちが自由に使いこなせる選択性のある平面計画とするために、保育室は横並びとして年齢毎の保育に加え、異年齢間の遊びを積極的に採り入れています。またランチスペースが、保育室とみんなのデッキの間に位置し、ランチを食べたり遊んだり、外の延長になったり、子どもたちの自由な活動の受け皿となります。さらにみんなのデッキは園庭と室内との中間領域的役目を果たし、子どもたちが考えて使う場所となります。



保育室とランチスペースの連続



みんなのデッキへとつながる多層構成



柔らかな曲線を描くランチルームを中心とした保育室やみんなのデッキ



県木トチノキが中心のみんなのデッキと水飲み足洗い場



保育所に囲まれたようなレインガーデンのある園庭

□コメント

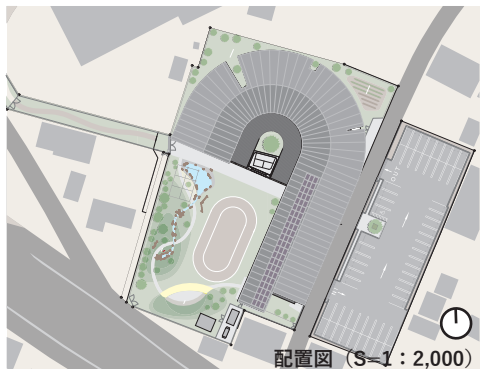
建築主：間々田中央保育所は、間々田北保育所（昭和 54 年築）及び網戸（あじと）保育所（昭和 5 1 年築）を統合した新設の公立保育所です。整備の基本理念として、①子どもが生活する場としてふさわしい、安心で快適な空間、②地域に開かれた子育て支援施設、③保育士等の職員が働きやすい環境、の3つを掲げました。

さらに、地球環境への配慮から市が推進するゼロカーボン・ネイチャーポジティブの取組を実践することを目指し、その一環として栃木県木材業協同組合連合会と協定を締結し、新園舎に栃木県産材を活用する体制を整えました。統合後の定員は 150 名と市内最大規模の公立保育所となり、多くの子どもたちを受け入れることが可能になりました。さらに、昨今の保育ニーズの多様化により一人ひとりの状況に応じたきめ細かな保育に対応できる子ども・子育て支援の場として、柔軟で多様な空間を整えた保育所になっています。子ども一人ひとりに寄り添った保育環境のもと、個性や主体性が育まれ、健やかな成長につながっていくことを期待しています。

設計者：地域のこどもたちが、園舎での暮らしや遊びを通して、地域の文化である「じゃがまいた」を想起する。そんな風景が、こどもたちの記憶に残り、やがてこの場所がそれぞれの原風景の一つとなっていくことを願い、計画しました。

また、公共建築という大きな場において、私たちのようなアトリエ設計事務所同士が手を携え、それぞれの専門性や個性を持ち寄りながら、一つの建築をつくる機会をいただいたことにも、深く感謝しています。ひとつの事務所だけでは生まれなかった視点や可能性を互いの強みを重ね合わせることで建築へと結んでいく。この経験は、アトリエ設計事務所が、これからどのように公共建築に関わり、どのような職能を育んでいくのかを考えるうえでも、大きな一歩となったと感じております。

施工者：建物の形が逆「J」の字であった為、特に難しいと感じた作業は R 部分の通りの墨出しでした。また、プレカット、屋根、内外壁、床を施工するにあたり、施工図を作成し、各所納まりの検討を重ね、工夫をし、R 形状を実現しました。完工まで、無事故無災害で工事を進めることができたこと、そして、地域のシンボルとなる素晴らしい作品に携わることができ、大変光栄に思います。



配置図 (S=1:2,000)

アクティブ・パッシブのバランス良い合理的な断面計画

6m以下の JAS 材でつくり切る断面により、適切な調達や工事費減を実現し、高窓や深い軒下空間により、夏場は自然光を遮り、冬場は採り入れることで空調負荷を下げ、中間期は重力換気による自然換気を促すことで空調に頼らない計画としています。また床輻射式空調により、夏はひんやり、冬はほんわか暖かい子どもたちに優しい空調計画としています（床暖房兼用）。さらに屋根面に太陽光パネルを設置し、発電機とともにバックアップ電源として、災害時に照明、コンセント、冷暖房を 12 時間継続運用できる計画としています。

